

おぼろげな平塚らいてうの会ニユース

平和憲法守る覚悟

会長 櫛田 ふき (談)



新千年紀を迎えて感慨無量のものがあります。この感懐には、この春、百二歳になる私の、平塚らいてうの会の会長としての長い念願がこめられています。

戦後の私は、宮本百合子に背中を押されて、新しい婦人運動の世界に入り、あまりに早すぎた百合子の没後は、平和運動、女性運動を平塚らいてうと行を共にしてきました。

明治の暁にいちはやく、

女性よ目ざめよとよびかけた大先輩らいてうその人と、腕を組んで「安保廃棄」のデモをした一九七〇年六月の日の記憶が鮮やかです。

「日本の独立なくして日本の平和も、女性の解放も、子どもの幸せもない」と、叫びつづけたらいてうは、「平和憲法を守りぬく覚悟」を訴えつづけました。それがすべての女性への、今日只今のもっとも緊急課題となっております。

「右手に平和憲法、左手にらいてう」といつづけた私。新千年紀に入ったらいてうの会への大きな希望と期待をこめて、新年のごあいさつを申し上げます。

生き方の指針に

京都市 毛利 美都里

生きるということはどういうことなのでしょう。年頃になれば当然のように結婚し、子どもに恵まれて平穩に生活する

それが生きるということなのだ、自分なりに納得しながら生活してきましたが、そのなかでも生き方の指針となったのが、平塚らいてうさんの教えでした。

京都府立第一高等女学校に在学中、熱をこめて幾度も、らいてうさんについて語る先生がおられました。戦後の荒廃した社会の中で、らいてうさんの言葉や生き方は、鮮烈に私の心に刻み込まれました。一昨年、日本経済新聞に掲載された



小林登美枝さんとの出会いも強烈な喜びでした。その六年前、夫に先立たれた私はどのように生きていけばいいのか、

ひとり悩んでいた時でもありました。

永い間、妻として母としてだけ生きてまいりましたが、ふたたびらいてうさんに学ぼうと思ひ、この会に入れていただきました。らいてうさんが「元始、女性は太陽であった」と高らかに宣言されてから九十年目の今年、いまだ解放されない女性の人生や差別の口実とされる母性について、考えさせられております。



らいてう先生と丸岡秀子先生と

日本女子大学名誉教授 宮崎 礼子

生と選挙の状況を話し合われたようであった。

「らいてう先生のお見舞いにこれから代々木病院へ行くから、あなたもいらっしやい」と丸岡秀子先生が声をかけてくださった。ある出版社の会議が終わったときである。



よく晴れた夕方、酸素テントを張ったベッドに臥し、らいてう先生は新聞を手に、ラジオを熱心に聞いておられた。大阪府知事選(革新統一・黒田了一候補)のニュースであった。一九七一年四月中旬のことである。らいてう先生は丸岡先

戦後』の著者、小林登美枝さんは「の中に私は、らいてうが『生』と『死』の境の中で、こんなふうな現実の政治の表層に関心をもっていたこと」を「らいてうは、ひたむきに、平和と独立を脅かされている日本の前途を憂えていたのだ」と、この第七回統一地方選挙に関して書きしるしている。

病室には、白い割烹着、和服姿の女性が二人、おひとりはお小林登美枝さん、もうひとりはおらいてう先生のご息敦史氏夫人。このおふたりのご様子は、ご本で拝見した りいてう先生の和服姿の雰囲気だと、私は感じ入った。

「今日はとてもお具合が良くて、おむすびを召し上がったんですよ」と小林さんがお話くださった。(この日は、同じ病院に入院中で、ベッドに腰をかけていらした刈田アサノさんにお会いする機会が得られた日でもあった。)

一九七一年六月十日付「新婦人しんぶん」に丸岡先生の「弔辞——平塚らいてう」(要旨)が寄せられている。

「……いわば求道者の姿勢であり、それを通して自己確立をめざす信念の人であった。……その強さで、平和と民主主義を希求し、それへの参加も積極的であった。……こうして、ご自身の生きる核をしつかり創られた。その核は人間の解放をめざし、女性の解放をめざすとき、炎のようにほとばしる熱情と、透명한視点を作りだされた。……したがってこの婦人解放の先駆者は、その時代、時代に、大変な苦難に耐えねばならなかったし、またそれに耐えぬく力をお持ちでした。今日の新しい問題として、人間の忍耐とか抑制とかを自分たちの生活の営みのなかで、どう位置づけるか。その認識を持つことの問題をもまた、先生は示しておられます。……圧制や差別に対して忍耐するだけでは、解決にはならない。しかし、忍耐や自己抑制そのものを否定してしまつては、その解放は期待できない。……先生は、その忍耐と抑制の道を辛抱強く歩き通された方でした……」

岡田八千代

「伊達虫」と名乗った頃

岡田八千代は、陸軍軍医・小山内健の三女として広島県に生まれた。劇作家の小山内薫は兄にあたる。父の死後、一家は東京麹町富士見町へ移り住む。八千代は富士見小学校、共立女子職業学校、成女学校で学んだ。

薫が森鷗外の知遇を得た関係から、八千代も鷗外の弟、三木竹二主宰の『歌舞伎』に劇評を掲載する。

劇作家として活躍が盛んになったころ、鷗外の世話で東京美術学校教授・岡田三郎助と結婚した。

シリーズ りいてうの周辺

『青鞥』が創刊されると著名だった八千代は賛助員となり、小説・詩・戯曲・劇評等を終刊まで寄せている。八千代には「芹影(女)」と「伊達虫」と二つの筆名があった。「伊達」は自宅のある渋谷区伊達町からとったものであろう。一九一三年ころから使われる。

「伊達虫」と名乗るのは、これまでの人生で何かにおぶつかり、「岡田八千代」では本当のことは書けない、今の自分に決別し「出直す」ためというものだった。

八千代がおぶつかったものとは、夫との結婚生活に原因があったらしい。夫には画家として自由な芸術活動をと願っていたが、夫は経済観念が乏しく、そのような夫を管理できない妻は悪妻といわれた。このころ八千代が長期の旅行で家を明けたため離婚の噂となるが、三郎助は離婚を否定。一方「伊達虫」は作品の中で「今までとは違う生活を送りたい」などと心情を吐露する。

ここで「伊達虫」に異議を唱えた人物がいた。らいてうである。名前を変える小細工ではなく、自己内部から発した「心的革新」でなくては自己脱却は望めないと批判する。らいてうは『人形の家』のノラが家出をしたことで何の解決になるだろうかと述べた。八千代の言動にもノラと同様の思いを感じたのである。か。八千代が夫と別居を決意するのは一九二五年である。

(らいてう研究会 加賀山亜希)

お話と映画のめぐり

記録映画「平塚らいてうの生涯」製作資金を集めるために同映画製作実行委員会では左記の「お話と映画のめぐり」を開催します。

▼会場 日本女子大学内(社) 桜楓会

桜楓2号館4階ホール

JR目白駅下車 都バス「新宿西口行」で「日本女子大前」下車

▼申込 平塚らいてうの会

TEL FAX 03(3401)6383

チケットは各回2千円

◎1月19日(金) 6時

お話 高野悦子さん(岩波ホール総支配人)

映画 「コルチャック先生」

(監督 アンジェイ・ワイダ)

◎1月24日(水) 1時30分

お話 一番ヶ瀬康子さん(長崎純心大教授)

映画 「ある老女の物語」

(監督 ポール・コックス)

◎1月30日(火) 1時30分

お話 羽田澄子さん(記録映画監督)

映画 「歌舞伎役者 片岡仁左衛門―孫右衛門の巻」

(監督 羽田澄子)

本の紹介

東京から遠く離れた金沢に住んでいた。……長姉の記憶によると、母も『青鞥』を読んで感激した一人だったという。それから間もなく、母は金沢女子師範

高野悦子さんの母
杉野柳と『青鞥』
岩波ホール総支配人で、平塚らいてうの記録映画をつくる会の製作委員の一人でもある高野悦子さんが、『母―老いに負けなかった人生』（文芸春秋）を出版された。九十六歳で亡くなられたお母様への追悼記であるが、映画一筋に生きていらした高野さんの背景に、この見事なまでの毅然とした明治生まれのお母様がいらしたことがよくわかる本である。帯に「九十歳になる母が痴呆症から回復した!」とあるように、現在介護や老いに直面して悩んでいる人びとにはまたとない励ましにもなる内容である。
しかし読み進むうちに、私はある箇所に来て目が釘付けになった。『青鞥』が発刊されたとき、母は十五歳、

に進学している」と書かれているではないか! いま私の属するらいてう研究会では、『青鞥』にかかわった女性たちを掘り起こして『青鞥人物事典』として今春出版しようと準備中である。最近でこそ『青鞥』の研究が少しは進んできたが、まだまだ平塚らいてうや伊藤野枝など一部の著名な人を除いて余り知られているとはいえない。ましてその読者ともなればなおのこと。しかし『青鞥』は最盛期には三千部発行されていた、ということにはそれに匹敵する読者がいたということになる。遠く金沢の地で『青鞥』を読んで胸をときめかしていた十五歳の少女。こうしたたくさんの女性たちが一粒の麦となつて、次の世代を準備した……。いま私はそうした少女たちの一人ひとりに声をかけたい気持ちになつている。

(副会長 折井美耶子)

『平塚らいてう著作集』(全7巻)

46判上製貼函入・各巻平均4000頁

全7巻セット価23100円(税込)

平塚らいてうの会のあっせん価

20000円(税込)

編集 小林登美枝、米田佐代子ほか
内容 第1巻 青鞥、第2巻 母性の主張について、第3巻 社会改造に対する婦人の使命、第4巻 むしろ性を礼拝せよ、第5巻 婦人戦線に参加して、第6巻 娘に母の遺産を語る、第7巻 私は永遠に失望しない

申込 平塚らいてうの会
TEL/FAX 03(3401)6383

〔事務局日誌〕

- 10月25日 ニュース第30号発行
- 11月6日 NPO申請書を東京都に提出、受理される(認証まで約4か月とのこと)
- 11月7日 記録映画をつくる実行委員会出席
- 11月22日 映画製作募金「お話と映画のつどい」(記録映画をつくる会主催)第1回開催。小林登美枝副会長あいさつ
- 11月30日 第3回理事會
- 12月7日 「お話と映画のつどい」第2回開催
- 12月10日 「お話と映画のつどい」第3回開催
- 12月12日 坂本福子弁護士に長野の土地取得問題で相談

2001年らいてう忌は

5月19日(土) 午後の予定です